第　４　回

キャリア教育産学官交流会

報　告　書

ふるさとと共に

郷　土　愛　プ　ロ　ジ　ェ　ク　ト

２　０　１　７．０　５．３　０

目次

２　概要

４　会長挨拶
６　来賓挨拶
８　基調講演

分科会
10　株式会社ＩＨＩ回転機械
12　一般社団法人ドリームペーパーコミュニケーションズ
14　辰野町商工会
16　宮田中学校
18　箕輪進修高校
20　川島小学校（辰野町教育委員会）
22　タグボード・辰野町産業振興課
24　辰野中学校ＰＴＡ

未来セッション
26　フィードバックインタビュー

28　エンディングインタビュー
30　写真
32　アンケート
39　メディア記事

概要

第４回キャリア教育産学官交流会

１　目　　的　　産学官の交流を通して、上伊那地域（家庭、住民、学校、産業界、行政）が一体となり､ふるさとを舞台にしたよりよい次世代育成と地域づくりを推進する機会にする。

２　日　　時　　平成２９年５月３０日（火）１３：３０～１７：４５（終了後　懇親会）

３　会　　場　　交流会　辰野町民会館
　　懇親会　辰野パークホテル

４　主　　催　　郷土愛プロジェクト

　　共　　催　　長野県教育委員会
　　辰野町キャリア教育推進協議会　伊那市キャリア教育推進協議会　駒ヶ根市キャリア教育推進協議会　箕輪町キャリア教育推進協議会　飯島町キャリア教育推進協議会　南箕輪村キャリア教育推進協議会　中川村キャリア教育推進協議会　宮田村キャリア教育推進協議会

　　後　　援　　辰野町　辰野町商工会　　上伊那教育会

５　参加人数　　産　　業　55 人
　　学　　校　108 人
　　公 官 庁　69 人
　　地　　域　15 人
　　当日参加　10 人
　　（うち交流会参加　257 人、懇親会参加　160 人）

６　交流会内容　（１）挨　　拶　　郷土愛プロジェクト　会　　長　　向山　孝一
　　開催地市町村代表　　辰野町長　　加島　範久
　　来　　賓　　長野県副知事　　太田　寛

　　（２）基調講演　　長野県立歴史館　館長　笹本　正治

「ふるさとに学ぶ」

（３）分科会①・②

１　「継続して繁栄していくために必要なこと
　　～「企業の教育訓練」の仕組み～」
　　株式会社ＩＨＩ回転機械　総務人事部辰野総務グループ部長
　　小澤　俊郎

２　「教えないから育つ！アクティブラーニングで人生力を育てる！」
　　一般社団法人　ドリームペーパーコミュニケーションズ
　　代表理事　米澤　晋也

３　「キャリアアップ事業　　①未来の経営者育成事業
　　②インターンシップ推進事業　③子供ものづくり教室」
　　辰野町商工会　主任経営支援員　三澤　保徳

４　「故郷に学ぶキャリア教育」
　　宮田中学校　教頭　土橋　浩一郎

５　「高校におけるキャリア教育について（インターンシップの事例報告）」
　　箕輪進修高校
　　進路指導主事　山崎　仁　キャリア教育担当　原田　裕太
　　生徒代表　　笠原　玲　毛利　綾華

６　「御柱で深まる地域とのきずな～地域の一員となる子どもたち～」
　　川島小学校（辰野町教育委員会）　校長　竹若　康雄

７　「実践型インターンシップ活動について」
　　タグボード・辰野町産業振興課
　　代表理事　伊藤　優　理事　宮原　陽子

８　「地域・保護者と共に家庭学習の充実を目指す
　　学校の取組に対するＰＴＡの関わり」
　　辰野中学校ＰＴＡ　Ｈ２７年度ＰＴＡ副会長　垣内　由佳

（４）未来セッション
　　フィードバックインタビュー
　　小牧　学・竹松　政志、城倉　賢一

（５）エンディングインタビュー
　　信州大学　学長　濱田　州博　　信州大学　教授　加藤　鉱三

７　司　　会　　〇オープニングセレモニー
　　上伊那広域連合　リニア推進課　地域振興課係　赤羽　徳幸
　　南箕輪村教育委員会　キャリア教育推進コーディネーター　百瀬　亜紀
　　〇基調講演・共有セッション・未来セッション・クロージング
　　伊那市教育委員　田畑　和輝
　　上伊那広域連合　キャリア教育コーディネーター　傳田　智子

挨拶

郷土愛プロジェクト

会長

向山　孝一

今年一月、自分たちのふるさとでどんな再発見ができたのかを発表しあう、第九回伊那谷再発見というプログラムがありました。そのひとつに、辰野町川島小学校の発表がありました。平成 18 年、長野県集中豪雨で天竜川が決壊して、岡谷で犠牲者が出るなどの被害があった時、辰野町内の１５３号線が土砂崩れで通行止めになりました。川島小の子どもたちは、「一体誰が通行止めにしたんだろう、もし通行止めにならなかったら車が川に落ちていたに違いない」と、その時の様子を、役場や消防など関係の大人たちに聞いたそうです。そして、当時の役場の担当者２人が、自分たちで考えて、通行止めにした、ということを知りました。そこから、どんな些細なことでもみんなでしてかなければならないということ、自らの命は自ら守ること、自分たちの暮らしは自分たちで守っていかなければならないんだと強く感じたこと、何が起きてもいいように、食料の備蓄は常に必要なんだ、と感じた、という発表をしてくれて、感銘を受けました。

今から１１０年前、国際連盟の事務次長までされた新渡戸稲造という方が、『武士道』という本を執筆しました。日本の道徳が何に基づいているのかを研究して、源頼朝が作った鎌倉幕府以来７００年の歴史の中で、武士が作ったひとつの生活規範、武士道というものが、日本の根幹のひとつにあるのではないか、それが日本古来の神道や仏教をうまく取り入れて、自分たちの道徳にしたのではないか、という本です。その中で、ふるさとにつながる国土について、新渡戸稲造博士は次のようにおっしゃっています。「国土は単に農産物を栽培してそこから収穫を得るだけのものではない。そこには山の神がいて水の神がいる。土地それぞれの氏神がいる。天地大自然によって人々が生かされている、という素朴な信仰心、そういったものが根付く場所であり、同時に先祖の霊が宿る神聖な住処である。それが国土であり、ふるさとである」と。私たち大人は、どのようなことが起きようと、私たちのふるさとの大事な価値観、風土歴史を自らきちんと勉強して、次の世代に伝えていくという大きな役目を担っていると思っています。それらを、それぞれいろんな社会的な立場の中で、私たちの先祖が作ってくれた大事な、素朴な信仰心や価値観、生き様をきちんと伝えていく。そのために自らの正しい生き方をしなくてはいけないと思っています。

私たちが住むふるさとには、ある意味で日本の原風景、私たちの先祖が大事にしていた文化が息づいていると思っています。そのことを子どもたちに伝えながら、そういう場に、フィールドに、子どもたちを立たせて、いろんな体験の中から、自分たちがこの地域の跡継ぎとなっていく、自分たちがここで生まれ、仕事をし、生活をし、家庭を持っていくんだと思える。そのためのキャリア教育の交流会であればと思っています。

開催市町村代表

辰野町長

加島　範久

辰野町には、中学校が一つ、小学校が五つあります。町では、それぞれの小中学校が使い勝手がいい予算を用意しています。それを使って、各学校で特色ある教育をしていただいています。また、町役場では昨年、若手職員が集まり、地元の良さを発見するために新聞づくりに取り組みました。私たちが悩んでいる人口減少に歯止めをかけたいという意味もありましたが、何よりふるさとを誇りに思い、遠くに住んでいても地元のために力になってくれるのでは、という思いもありました。

町内には、学校の通学路にいつも立っていてくださる方、いろんな学校行事に積極的に参加してくださる方などがいて、多くの方々に支えていただいています。それを見て、子どもたちも心強く思っていると思います。こうした交流会等の機会を通じて、そうした皆さんのことを伝え、思いが広がればありがたいと思っています。

もうすぐ辰野ほたるまつりです。辰野西小学校では、何十年も前からほたるやカワニナを育てています。それが、現在、こうしてほたる祭りを盛り上げることができていることにもつながっています。ぜひ皆さんもお越しください。

来賓

長野県副知事

太田　寛

本日は少し早めに辰野町に入り、辰野町美術館に足を運びました。そこで、長野県宝である仮面土偶を見て、国宝としてしられる縄文のビーナスに匹敵する技術の高さがあると感じました。そこで、この技術はどのように伝承されてきたのだろうか、という思いになりました。おそらく、土偶の名人のような人が、きちんと次の世代に伝えていったんだろうと思います。そういう意味で、本日の交流会も、大きな意味では技術の継承、その人材育成ということだと思っています。

また、荒神山に登り、辰野町を一望する機会も得ました。山に囲まれ、天竜川とその支流も流れ、本当にきれいなところだと感じました。もちろん、田植えが終わった水田も広がっていましたが、近代的な工場もあり、バランスが取れた町だとも感じました。そこには、それぞれの立場で町の将来を背負っている皆さんがいるわけで、私自身も今日いちにち、一人でも多くのそうした人たちと話し、交流したいと思っています。

私たちは本当にふるさとである上伊那を知っているのでしょうか。

キャリア教育そのほかいろいろ言いますが、私たち一人ひとりがどれだけ地元を知っているか、子どもたちには知るべきだといいながら、私たち大人は知る努力をどれだけしているのだろうか、これが今日の課題です。

私たちが住んでいる上伊那は、一体どんな場所でしょうか。当たり前のことですが、私たちのふるさとは日本のどこでもない、上伊那でしかない場所です。まず、中央構造線が走っています。地形の大きな変化のあるところです。その上に私たちが生きていることはまず確認したいと思います。そして、その中央を天竜川が流れています。天竜川は、天と太平洋をつなぐ川です。そして、南アルプス、中央アルプスの美しさ。このふたつのアルプスを同時に見ることができるのが、私たち上伊那の人間です。そして、その私たちが生きている自然環境の中に、長い歴史があります。今までこの地域に生きたすべての人は、この地域が少しでもよくなるように、そういう思いでいたはずです。私たちはそうした先人たちの努力や活動を再認識しなければいけません。

例えば、一つの例ですが、高遠町にある進徳館は、非常に短い期間しかなかった藩校です。しかも高遠藩は極めて貧乏な藩です。進徳館は、伊沢修二を輩出し、彼は日本の教育を大きく変える人になっていきました。有賀喜左衛門（辰野町出身の社会学者）も忘れてはなりません。こうした私たちの先輩たちが、一生懸命に、地域だけでなく日本を作ろうとしました。進徳館は、長野県全体の信州教育の中心を成すと同時に、日本全体の教育にまで関わってきた。このことを大事にしていかなくてはいけないと思います。

私たちは、古いことだけやっていればいいのではありません。重要なのは文化を創り、育てることです。未来に向かってどうするかです。私たちは、先人たちの努力をきちんと受け継いでいるでしょうか。私は、長野県立歴史館に勤めています。私たちは、長野県がよりよくなるようにしていきたいと思っています。私たちの材料は過去と現在しかありません。よりよい未来をつくるためには過去と現在をしっかり認識しなければいけないと思っています。その際には、先人たちの努力をしっかり受け継がなければいけません。過去の努力ぬきにして今が

あるわけではありません。そして、何よりも地域の誇りは未来をつくっていきます。子どもたちが地域に誇りと愛着を持てば、地域にとどまってくれます。高等学校においても、東大に何人入ったかとか、国立大学に何人入ったか、ということがよく言われますが、今長野県では信州学を高等学校の必修にしました。ということは、地元のことをよく知っていて、地元に残ってくれる人こそ評価される時代がきたのかもしれません。

皆さんは子どもたちに、どのぐらい誇りを持ってもらえるような努力をしているでしょうか。どんな文化であっても、出発点があります。いつまでも過去にだけ目を向ける必要はありません。そういう中で、私たちは、あの繁栄した昭和という時代に何をしたでしょうか。私たちは本当に文化を作り上げたでしょうか。もう一度、そういったことを考えてみたいと思います。今や逆境はチャンスです。あの進徳館は、あれだけ小さな藩で、しかも短い期間だったけれども、日本に影響力を残した。私たちはそのようなことをやっているでしょうか。距離や時間を、今やネット社会が変えました。アイディア次第で新たな産業がつくれる時代になりました。こういう中で私たちがやっていかなければいけないのは、この美しい景観をもっとよくして、次の世代に伝えていかなければならないということです。

私は、あちこちで気持ちのいい景観、美しい景観があるところには美しい人がいる、と言っています。気持ちがいい人たちがいるところは景観も気持ちよくなります。上伊那はきっとそうでしょうね。もっともっと気持ちのいい人たちが増えてくれば、もっともっと景観もよくなるでしょう。そのためには、子どもたちを育てなければいけません。テレビを見ているとすべて都会の主張です。でも、上伊那の人たちは奥ゆかしいので、上伊那がいいとほとんど言いません。上伊那がいい、と言わなかったら、子どもたちは良さに気がつきません。私たちはいつまでたっても奥ゆかしいのがいいのではなくて、きちんと主張しましょう。

私たちは、どれだけ歴史に対して責任を持っているでしょうか。

こういう激変しようとする時代において、私たちひとりひとりはどれだけのことをしているでしょうか。キャリア教育をする時、私たちはそれに対してどういう責任を取っているか、どれだけ学んでいるか、それが試されています。

私たちが少しでも学んで、私たちがいいところを発見して、その次の時代にもっとよくしてもらおうというバトンタッチをしていかなければなりません。そのためには、ひとりひとりが横につながって、みんなでバトンタッチをしていくようにしましょう。

責任は、私たちひとりひとりにあります。

分科会
1

継続して繁栄していくために必要なこと
～「企業の教育訓練」の仕組み～

発表者：（株）ＩＨＩ回転機械　総務人事部辰野総務グループ部長
小澤　俊郎
司会・運営：伊那市教育委員会　タカノ株式会社

● 発 表 内 容

会社の発展が社会の発展、地域の活性化、そして、生活の安定につながると考えている。その目的を達成させるために社員教育をきちんと実施している。

具体例として、ここ数日辰野中学校、箕輪中学校の生徒さん達が弊社で職場体験学習を実施しているが、学習するにあたり、事前に安全教育、また皆さんの両親がどんな想いで働いているか感じてもらうようお願いしている。現場に入ってもらう際に重要としていることは、社員にも該当することだが、①幸せで安定した生活を送る社会人になる。②働くことの責任感を持つ。③時間の使い方を意識する。④世代の違う人と上手に生活していくこと。⑤自分たちが関わった製品が市場に出て社会でどうように使われているかを知り、社会への貢献を実感する。ということである。

報酬、収入を得るためには、階層関係なく常に社員は勉強していかなければならない。まずは健康に働いてもらうために災害に遭わない教育をし、安全優先の会社を作る目標を立て、技能競技会など行っている。

品質の一定水準を維持していくため、教育訓練をしたり、自分自身にプライドを持たせ、１年間通したプログラムを立て実践していくようにしている。

また、部下ひとりひとりのマネジメントを上げていくため、上司は常に部下教育を行うようにしている。

このような教育を行って、会社が発展していくことにより、地元の人たちと協調性・信頼を保ち、地域の活性化に貢献していきたい。

● 話し合い後の発表

質問・意見

（１）大変参考になった。

Ｑ：今の生徒たちにどんな力が会社として求められるかということが分かっていれば、学校として今から力をつけさせたいと思うが、何かアドバスがあればお願いしたい。

Ａ：今までどおり、学校生活を楽しんでもらえばいいと思うが、会社に入ってからは、世代の違う人たちと生活していくので、協調性を持つことは必要だと思う。

（２）社員は会社の歴史をどれだけ知っているか？地元住民からすると、いつか企業が地元から離れてしまうのではないかという不安があるので、地元に根付いた企業という意識で、社員へ会社の歴史を伝えてほしい。

参加者より	・未来を担うべき中学生を古い教員が教えていく不安があります。どんな教育をしたらいいのかと不安に思うのですが、明快に、協調性、和の中で役割が分かって責任を果たせる子。は心強かったです。 ・幸せで安定した生活を送るための事前学習と言う点で企業がしっかりとしたスタンスをもっているのはスゴイと思いました。学生に働くことの意義を伝えることはこれからもとても大切だと感じました。 ・貴重なお話しありがとうございました。社員教育は課題なので参考にさせていただきます。 ・企業の方がどの様なことを社員に求めているかよくわかりました。ありがとうございました。中学の職場体験学習に於いて生徒がどの様なことを教えていただいているのか、学校としてももっと知っておかなければならないと思いました。早速日々の指導に生かしていきたいと思います。 ・企業での教育について知れて学校にも応用できそうな視点を得ることができました。 ・さすが大企業という仕組みを教えていただきありがとうございました。すごく参考になりました。社員教育は大きくても小さくても同じかと思いますので参考にして自社でも仕組みを作ります。 ・防衛企業だと思っていました。　社員の子ども達に職業体験をさせてほしい。キャリア教育で各学校に伺うと子ども達が仕事について不安が有ったり、仕事とは何なのかという事がわかっていない。父親、母親の働く姿を見て受ける刺激は強烈で大変役立つ。 ・「製品を通じた社会貢献」という言葉が印象的でした。自分でやっていること、自分の仕事が何につながっているのか、どんな役にたっているのか。そういう所を意識しながら自分も仕事をしていきたいと思える講演でした。 ・安全についての体験的な研修という内容が参考になりました。 ・「ずっと勉強」「協調性」（異年齢の方との）「健康・安全」という言葉が心に残りました。 ・中学生の職場体験受け入れについてあれだけ配慮をいただいていることに感謝申し上げます。

分科会
2

教えないから育つ！
アクティブラーニングで人生力を育てる！

発表者：一般社団法人　ドリームペーパーコミュニケーションズ
代表理事　米澤　晋也
司会・運営：駒ヶ根市教育委員会　日本通運株式会社

●　発 表 内 容

地元辰野町で新聞販売店を経営する傍らで、「夢新聞」という活動をしています。夢新聞とは、今日の日付ではなく、自分の夢が叶い、自分が活躍している未来の日付で作る手作りの新聞を発行するワークショップで、７年間の活動の間で、ジュニア、シニアそして企業等で６，１３４名がこのワークショップに参加しています。たとえば、和歌山県の小学６年生が書いた新聞には、「２００歳まで生きた」と書いてあります。夢新聞には、未来の事を完了形で書くといるルールがあります。学校からは、総合学習の時間を活用しキャリア教育として依頼を受ける事が多いのですが、夢新聞の講師は、教師、教育者ではありませんビジネスパーソンであり、ほとんどが企業経営者です。だからこそ子供達に社会の実態、実際を子供達に紹介して、体験してもらって、これからの時代を生きていく為にどんな力が大切なのか教えるのでなく、感じる場を作るという事をさせて頂いています。

夢は、自分の中に納めておくだけでなく、人に話し、紙に残し、未来の日付を入れたほうが良いと言われますが、実体験として本当だと感じています。夢を叶える為にもう一つ大事なことがあると思います。夢は決してひとりだけでは叶えることは出来ないということです。この世で、たった一人で夢を叶えた人はいないと思います。夢を叶えるには、支えてくれる人がいて、支える方に回ってみんなで叶えていく事が現実だと思います。子供達には、どんな時代になっても、どんな場に居ても、仲間と協力して成果を上げていくとみんなの夢が叶うんだと子供達に言っています。

子供達がこれから生きる時代はどんな時代なのか、私たちが生きてきた時代は大量生産、大量消費に支えられて経済が成長していた時代で、求められる能力には正解があった。その正解を如何に効率良く導きだせるかという、パズルを解くのと同じ能力が求められましたが、大量生産、大量消費の時代は既に終焉を迎えました。今の

時代にビジネスをすることはすごく楽しいが、すごく難しい時代です。それは、正解がない時代と言われているからです。ビジネスの現場で具体的に紹介すると、例えば、カフェをオープンしようとしてどんなカフェがヒットするか考えた時、以前であればお客様に何が良いかを聴くことが正解を知る一番早い方法でしたが、今はお客様が満たされていて、今更何が良いのかを聴いても答えられない正解がない時代、言い換えれば無数に正解がある時代です。これから子供達が生きていく時代は、レゴのブロックを作るような無数にある正解の中からどんなかっこいいブロックを作るか、創造力、クリエイティブな能力が求められる時代になっていくと考えています。

もう一つとても大切なことがあります。キャシー・デビットソンさんが発表し世界中で大騒ぎとなった、「２０１１年度小学校に入学した子供達の６５％は大学卒業時に今存在していない職業に就くだろうと」いうものです。産業の新陳代謝がどんどん起こり、今ある職業でも無くなるものが沢山あり、子供達も将来は一度や二度の転職を必ず経験することになると思います。経団連と経済産業省は、これからの時代を生き抜くために「社会人基礎力」が必要であるとかなり昔から言い始めました。柱として、１「前に踏み出す力」、２「考え抜く力」、３「チームで働く力」の三つの力を掲げています。夢新聞協会では、３「チームで働く力」に着目しました。

この活動を通して親として感じている事で、大人は子供達の自立的成長を奪ってしまっているのではないかと時々感じています。失敗を通じて体験できる事もあるのに、答えを教えてしまったり、注意をしてしまったり、お膳立てをしてしまったりします。人間が生得的に持っている、自立的、積極的な力を信頼し、見守って伸ばしていく事が大切と思っています。また、２０２０年にアクティブラーニングで育った自立的な課題解決能力を持った子供達が社会に出てきますが、その子達を受け入れることが出来る企業がどれだけあるのかとも考えています。

● 話し合い後の発表

・自分の子供の夢を机に張るようにして、全員の夢をみんなが知っていて、クラスの子供達から言葉を掛けてもらうようにしています。自分の夢が変われば、書き換える事も自由としていま。夢を完了形で書くということが参考になりました。

・自分は、先生、講師等に与えられて何かをして、解らない事は聞いて教えてもらうということが多かったので、いちから子供達が自分たちで考えてグループを作ったり、助けたり、周りを見て行動するそれを支える活動は素晴らしいと思いました。さらに小中学校で広げて、自分たちで考えて行動できる子供達を育てていければと思いました。

・中学校で担任をしていますが、転ばぬ先の杖ではないですがサポートしたり手を出してしまいますが、子供達が失敗することも経験なんだと覚悟を決めることができました。

・これからの時代に必要なことが語られていて、大人たちが子供だからと少々軽視している部分、大人が我が事として思っていない事を語って頂き、これからの糧として行きたいと思います。

参加者より	・すばらしい事例発表ありがとうございました。夢を描けるきっかけづくり、大切なことだと思います。夢を描く、探す中で人は成長できると思います。 ・アクティブラーニングを本格的にやりたくて、ほんとに話せる子たちを作ると授業も楽です。（自然と協力しているし…）ただ、そうした子たちが世の中でうまくいくのか…ちょっと心配です。今年就職した子が「社会は小学校みたいだ。いろんな人がいる」と言っていました。 ・考える、感じるコミュニケーションをみずからする場づくりを会社でもしていくことの大切さを感じました。答えの１つでない時代へのビジネスモデルを考えさせられました。 ・チームで動くことに慣れていないメンバーがいてちょうど苦労しています。助けられ助けあうことがうまくできる人財は本当に貴重と思います。ありがとうございました。

分科会

3

キャリアアップ事業

①未来の経営者育成事業
②インターンシップ推進事業
③子供ものづくり教室

発表者：辰野町商工会　主任経営支援員　三澤　保徳
司会・運営：辰野町教育委員会　株式会社ヤマウラ

● 発 表 内 容

商工会は、地域経済振興のために活動している。

（１） 後継請負人事業

事業所の廃業率が高い中、辰野町商工会では「後継請負人事業」として、後継ぎがいないが事業（設備・経営等）を譲りたい事業者のために、商工会でマッチングを行い、外部から後継者を探してくる事業に取り組んだ。これは、経営者候補の４番バッターを探してくる取り組みである。この事業は、県の最優秀事業に表彰され、「長野県事業引継ぎ支援センター」が創設され県の事業へ移管された。

（２） 未来経営人事業

この事業は、学生を対象に企業経営に向けた下地教育を行い、長期的な視点で将来の経営者を育成することを目的としている。企画内容を公募し、採択されたものに対して補助金を交付。学校と年間スケジュールを確認し、事業内容により対象店舗を確保するところまで商工会がバックアップ。店舗の確認、借りる店舗への交渉からは学生が行う。事業計画を作成し、店内装飾、仕入れ事業者との打合せ、事業の推進、営業結果の取りまとめ、仕入れ業者への支払いまで学生が行い、反省会を持って結果確認、課題・問題の洗い出し、改善策を確認して次回の営業に反映した事業計画書の作成し次回の営業を実施する。将来この事業は行ける、又はダメだと感じてもらうことが重要であり、そこを目的としている。将来、この辰野町において若い経営者が誕生してくれることを願っている。事業内容としては、歌声喫茶、レトロ喫茶、パソコン教室、簿記講習会など。

（３） インターンシップ推進事業

目的としては、①社会生活、就業生活を通し、基本的資質の理解　②関心のある仕事を経験する中で進路選択。③コミュニケーション能力の向上、マナーや人間関係の大切さを理解。辰野高校の商業科生徒を対象に始め、現在では普通科の生徒にも対象を広げて実施。

（４） 子供ものづくり教室

ものづくり職人の育成と技術者の育成を目的として、町の産業である光学レンズを用いた作品の制作や木工作品などを作る教室を開催。

話し合い後の発表

・小中学校でどんなことができるか。小学校で田植えの体験をさせるが、この体験を仕事につなげていくには更なることが必要か。
・中学校公民の学習　経済、仕事の仕組みなど実態に即して指導したい。
・辰野高校商業科と商工会とのコラボレーションで、本物に近い授業経験をしている。辰野町や上伊那へ戻ってきてほしい。
・社会で自立できる人間を育てたい。
・製造業に人がいらなくなる。５０％の仕事がなくなる。

参加者より	・高校生と商工会の取り組みから、小・中学校のキャリア教育で行っている職場体験よりずっと進んだ（突っ込んだ）取り組みが行われており、大いに刺激を受けました。地域の商店や企業に協力していただいて成り立つ体験活動ですが、地元企業の得意分野を学校でどんどん取り入れ、「ものづくり」や職場体験を行えるとよいと感じました。 ・あっという間の発表時間でした。もっと聞きたかったです。 ・辰野町の取り組みの「未来の経営者育成事業」については、今後の人口減少にどのように対応していったらよいのかと思いました。生産等についても、買ってくれる人がいない現状なのではないかと思いました。 ・未来を担う子どもを育てる目標がよく分かりました。発表はよくまとまった手際のよい発表でした。商工会の目指していることが成果となって現れてくることを願っています。 ・今日はお話を聞かせていただき、ありがとうございました。高校生への未来経営人事業についてですが、どれくらいの高校生が実際に辰野町で後継者として働いているのか、また、辰野町で後継者となることを希望した場合に、それを受け入れるルートはあるのかということが気になりました。貴重な経験をさせてもらった高校生が辰野で活躍することを祈ります。今日は、貴重なお話を伺い大変勉強になりました。ありがとうございました。 ・一緒にめったに聞けない会長さんの話が聞けてよかったです。前に辰野西小にいたころより一段と暗くなった商店街が残念でしたが、話を聞いて商店街全体が成功事例になるようにがんばってくださるといいなと思いました。 ・商工会員の中で、事業承継、顧客確保、利益計上、商品（製品）開発等で成功している事業者から、そのノウハウや経営手腕、方法、実践を学ぶ機会を会として持ってはどうでしょう。プロはプロから学ぶべきです。ガンバレー!

分科会

4

故郷に学ぶキャリア教育

発表者：宮田中学校　教頭　土橋　浩一郎
司会・運営：箕輪町教育委員会　伊那バス株式会社

●　発 表 内 容

プライムタイム（総合的な学習の時間）でのキャリア教育の実践から

【教師の願いと育みたい力】

〇教師の願うこと→自分の可能性を信じ、人や環境と関わり、互いに生かし生かされ、自分と社会の発展に向かって歩む生徒の育成（社会的な背景を加味し）

〇子どもに求められるものは、様々なものや人と積極的に関わり現状と関連付けて認識し、判断し、行動できる力と人として信頼される力。これらの力を、宮田という地域と関わりながら考え合うことが大切と考えている。

【生徒の感想】

・職場体験を通して、心揺さぶられ仕事に対する考え変わった。

・宮田村の調査を通して、宮田っていいじゃんという思いが強くなった

【プラムタイムのキャリア教育の実際について】

〇産官学の連携は、官の役場と教委（推進員会、学校支援実行委員会）、産の村商工会や事業所が、絶大な支援をしてくれて有難い。

〇プラムタイムのカリキュラムは、物や人との関わりを通して問題解決の力と人と関わり共感する力を高めるこ

とを目標として、３年間で学びが進化するよう全体計画を立てている。テーマは（１年：知ろう宮田村　２年：体験しよう宮田村　３年：より良くしよう宮田村）で、内容については各学年の先生方と生徒が工夫している。

・１年の調査は、村政、農業、製造業①、②、商業・特産物、福祉、環境の７分野
・２年の体験は、一年次の調査活動と関連を持たせての職場体験、キャリアフォーラムへの参加
・３年の活動は、修学旅行での PR、宮田カルタづくり、みやっこバーガーの商品化、喫茶店の開業、村生徒議会への参加

【まとめとして】

〇これらの活動を通して、変化の大きな社会の中で、様々な情報を関連付けて判断し、行動する経験や、人とともに何かを成し遂げる経験としてのキャリア教育をこれからも大事にしていきたい。

● 話し合い後の発表

〇２か月前に、村の小学校に赴任し係になったがが、宮田村のことを知らない中で、中学校の取り組みの様子を聞くことができた。そんな中学の活動につながるような小学校の学習も考えていきたい。

〇宮田村が続けてきたキャリア教育が、１，２，３年と関連があり、活動がつながっている様子に感心した。

〇村内に、２校の小学校と１校の中学校があるが、その規模であれば宮田村のような取り組みは十分可能だと感じた。今後考えていきたい。

〇１，２年で調査や体験を積み上げていくと、３年生になった時にあんなにいろいろなアイデアを持って体験したり、村や地域に発信できるということが素晴らしいと思った。

参加者より	・生徒の積極的取り組み、産学官の連携が、地域への貢献や社会で生きていく力を育てるキャリア教育をより強固にしているように感じました。 中学校での体験を高校でも活かしていきたいと思います。また、いつまでも残る体験を生徒にさせてあげるのも教員の使命のように感じました。　伊那北高校　掛川 ・体系だったキャリア教育がなされていて、すばらしい実践だと思います。三年生が議会で意見発表するなどりっぱだと思います。 ・1 年次からの関連した 3 年間のカリキュラムが良いなと思いました。 土台としての筋道をつけることで、どの学年のどのクラスの担任もやることがわかっていてよいと思う。生徒の立場とすれば自分の意欲につながりがある活動として 3 年間取り組めるだろうと思った。 “地域を知る”“地域に学ぶ”地域に提案する“という流れがよかった。 ・1 年生、2 年生、3 年生とステップアップし進めていることが、すばらしいと思いました。また、結果を子ども議会へ提言し子ども達の気持ちを伝えることまで行い、良い取り組みと思います。 ・3 年間通してのすばらしいカリキュラムができていてすごいなと思いました。 学ぶ、体験するだけでなく、ＰＲ、提案など、自分たちの思いを伝える機会もあり、子どもたちも宮田村のことをよく考える機会になっているのだなと感じました。 ありがとうございました。 ・宮田出身でない先生方が宮田を好きになって宮田の良さを伝える...　すごいです。 ・企業との連携が素晴らしい！！コンセンサスのとり方がもっと知りたい。苦悩も。 ありがとうございました。

分科会
5

高校におけるキャリア教育について
（インターンシップの事例報告）

発表者：箕輪進修高校
進路指導主事　山崎仁　キャリア教育担当　原田裕太
生徒代表　　笠原　玲　毛利綾華
司会・運営：　飯島町教育委員会　アルプス中央信用金庫

●　発 表 内 容

箕輪進修高校 3 年間のキャリア教育　（インターンシップを通じてライフ・キャリアの形成を養う）
1 年生＜自己理解と社会参画　「SST」と「施設実習」＞
・対人関係ゲームを通じ協働性やコミュニケーション能力を養う。
・SST：「ソーシャル・スキル・トレーニング」社会性を身に着けるための学習。
　　あいさつ、人との関わり方、お願いをするときなどのシミュレーションを行い実践する。
・福祉施設実習：介護施設などで SST に基づく実習を通し社会に触れる。
2 年生＜将来のシミュレーション＞
・インターンシップ：工業科・普通科生徒が 73 事業所への実習　期間は夏休み 3 日間。
・　　同事前学習：「マナー講座」「電話の掛け方」「働く事とは」講座による習得。
・　　同実践　　：各事業所へ体験　毎日の日誌　反省とお礼
・　　同報告会　：働く事の重要性認識と進路に向けての知識増幅。
3 年生＜ライフ・キャリアの形成＞
・課題研究（工業科）：工業分野の探求活動（7 講座選択）
・課題ゼミ（普通科）：教科学習とは別カリキュラム。課題に対する挑戦。キャリア形成。
・報告・発表　　：講座あるいは課題ゼミごと自己の取組み発表。
　　自分の将来の進路への探求と課題成果による就職・進学を目指す。

● 話し合い後の発表

〇産業界から

事業主からの故郷の思いや、自社に対する思いを語ってもらう機会が少ないと思われる。これはキャリア教育の中で一番大切な事であり、郷土で起業した先輩たちの熱い思いを直接聞き、どう感じるか、それによって郷土で働く意義を持っていただきたい。そうした活動を短い時間であるが組み入れていただく事、また出張講座の時間を設けてもらう事を希望する。

〇行政側から

多くの企業にインターンシップによる体験をしていただきたいが、数や時間は限られてしまう。今後行政の立場で協力できる事を学校側と話し合い、多くの生徒がいろんな職種の体験ができ、いろんな進路を考える環境整備を施していきたい。

〇学校側から

生徒の希望する会社へのインターンシップを依頼するにあたり、断わられるケースが多い。できれば多くの企業の方のお話や体験談を聞く事により、その業種の必要とする技術の習得や進路についてアドバイスや就職の機会を与えていただければ有り難い。また、せっかく就職しても離職率が高校生の場合大きいので（３０％）早くに就職先を絞り、生涯続けてもらえるようアドバイスして行きたい。就職時に妥協をしない指導を行って行きたい。

参加者より	・生徒のお 2 人がなぜこの高校を選んだのかを堂々と話してくれたのが印象に残りました。中学校でも職場体験をしますが、高校でのインターシップは社会への出口により近いものになり、感じ方も意欲もちがうと思います。中高キャリア教育の連携、お互いにキャリ教育をどう進めているか情報交換と縦の交流は必要だと感じました。 ・学びは楽しくという姿勢が伝わってきました。インターシップでは一期一会で取り組んで下さいね。 ・就職支援のためのキャリア教育だけでなく、将来を考えるためのキャリア教育がこれからは必要ではないでしょうか。 ・キャリア教育発表をありがとうございました。高校で行われている内容を知り、よい時間でした。就職が切実な課題となる高校の厳しさも改めて知りました。箕輪町内に勤務する小学校教員ですが、交流等できることがあれば協力したいです。お話も聞きたいです。 ・大人の前でプレゼンすることはなかなか大変なことだと思いますが、よく自分の思いを語られてくれました。学校の外へ目を向けることは、自分で気づいて考えてチャンスだと思います。全校でインターシップに取り組み、しだいに学校の中で生徒の皆さんが主体的に考えられるようになればいいと思いました。デュアルシステムなどへと発展できないかなぁ。 ・毛利さん笠原さんの発表の姿勢、態度が素晴らしく感心しました。職業ということもありますが、社会人としての自覚や希望といった思いが育っているのを感じま

分科会
6

御柱で深まる地域とのきずな
～地域の一員となる子どもたち～

発表者：川島小学校　校長　竹若　康雄
教頭　牧野　孝裕　　教諭　伊藤　達也
司会・運営：南箕輪村教育委員会　養命酒製造株式会社

● 発 表 内 容

（１） 辰野町の御柱について

７年に一度諏訪御柱と同年に町内の各地区で開催される。子どもも木遣りや花笠踊り等で参加。

（２）町教育委員会と各学校の取り組み

宮澤教育長「御柱の日は授業・部活は休み」「東小も敷地内で協力」

（３）川島小の取り組み

・４　月　…宮木地区の御柱を教員が見学
・６　月　…音楽会にて御柱の木遣り・オペレッタ披露
（地域の方々も一緒に声を出し盛り上がる。）
・８　月　…御柱準備
各地区の花笠踊りを取り入れ、川島小 ver. の花笠踊りを作成
＜伊藤先生による花笠踊りの実演＞
・９　月　…運動会にて川島小 ver. 花笠踊り披露
・１０月　…御柱開催
（花笠踊りを披露する子どもたち。地域人として活躍する祖父母や両親の姿。）

（４）川島を襲った災害についての調査

平成１８年７月の水害では、町内を通る国道１５３号線が崩落し、寸断された。その際、崩落前に異変に気付き自動車の通行止めをした人がいた。子どもたちは、通行止めをした役場職員や消防団員を調査し、その活躍をはじめ、日々地域を守り支える人々について学習した。

話し合い後の発表

・私の町では御柱のようなお祭りがないため、御柱という古くから続く大きなお祭りで地域の方々が一つになれることがうらやましく感じた。しかし、「古くから続く大きなお祭り」に限らず、地域みんなで一つになれることは何かあるはず。今回の発表を参考に、私の町でも何かやっていきたいと思うきっかけとなった。

・　川島は日本の原風景が広がるとても素晴らしい地区。きっと多くの人が「懐かしい」と感じる大自然があり、あたたかい人がいる。しかし、住む人が減り、地域の人が減っている。そんな川島をもっとアピールしていきたいという思いで活動している。知れば、行きたくなる場所・帰りたくなる場所。ぜひ一度川島にお越しください。

・辰野の御柱については初めて聞いた。音楽会のビデオを見て、地域の人に支えられる子どもたち、学校の姿に心が温まった。

参加者より	
	・御柱を通して、災害の学習を通して、地域を知り・つながり・引き継がれていく学習を見させていただきました。つなげる役割を学校が担っているのも素晴らしいと思いました。ありがとうございました。 ・先生方が各地区の踊りの練習に行き、各地区の要素を集めて川島小オリジナルの花笠踊りをつくっていらっしゃったその姿勢、情熱に胸を打たれました。小さな学校だからこそ、「地域と共に」という思いがより強いのだと思います。学校の特色を生かしながら地域と子どもを育てていけたら、と思います。 ・水害について調査した子どもから「将来消防団長になりたい」という言葉が出ていたのが驚きました。地域の歴史を学ぶことによって、彼の未来の選択肢が一つ増えたのですね。 ・東信出身者のため、御柱祭の知識があまりなく、初めてうかがったことばかりでした。先生との交流を通し、御柱祭は地域の人々との結びつきを深める大事な意義をもつ行事だと思いました。 ・今後の取り組みにも期待しています。ありがとうございました。 ・宮澤教育長の「御柱の日は部活動を休みにする」という声。年齢の垣根を越え、辰野の子を地域人として育てていく姿勢が素敵です。参考にしていきます。 ・学校と地域のつながりについての発表でしたが、学校と地域の取り組みに企業ができることもきっとあるだろうと感じた。会社がある地域のお祭りや取り組みに「地域の会社の職員」として参加することもできそうだと感じた。

分科会

7

自分の個性を活かし、自創のチカラを育む「インターンシッププロジェクト」

発表者：一般社団法人　ＴＵＧ　ＢＯＡＴ　伊藤　優　宮原　陽子
司会・運営：中川村教育委員会　株式会社　ティービーエム

発 表 内 容

「地域実践型インターンシップ」とは小規模事業所が学生の力を借りて新しい経営・起業を起したいという長期的なプログラムである。都市部の若者をこちらに呼んで地域をしってもらうという目的もある。「タグボート」は創業 90 年の町の新聞屋さんが母体となっている。これまでも地域貢献のひとつとして毎月のニュースレターの発行、一人暮らしの高齢者のお宅訪問、川のほとりでのカフェオープン等いろいろな活動をおこなってきた。辰野町の第 5 次総合計画のひとつとして行ったワークショップを企画する中で、地域という大きな船を牽引していこうと設立された。

若者の都市部への流出が問題となっているが、長野県は企業数が多いにもかかわらず学生と企業がつながってないと感じている。地域の小規模事業所は人件費にお金をかけられない、学生は知識を得たり、経験をしたい、この両者の思いをマッチングしたものが「インターンシップ」である。

学生の持っているそれぞれの個性を活かしながら役割を決め、目的に向かって活動していく。「私の資源」「私の強み」をチームで活かしながら自己肯定感を高め、「私らしく働く」と言うことを考えていく場の提供をしている。インターンシップにおいて学びは実践である。知識イコール学びではない。実践の大切さ、自分の強みを最大限に活かす方法等学生たちは自分が何をしたらいいのかを考え活動する。その活動がまた地域の底力の一つとなる。

インターンシップを通して交流のできた子たちに困ったら信州に帰っておいでといえる。若者との交流の必要性を強く感じている。未来は不確実なので自分から創っていく、行こうとする、その時背中を押してやれるのはまわりの大人ではないか。

● 話し合い後の発表

① この上伊那の連携が強みである。「キャリア教育」が実践の場である。
② 人・本・役割等の出逢いが実践のチャンスである。またそれが成長にもつながる。
③ 子どもたちの学びを発揮できる場作りを日常的に行い、実践につなげる子どもを育てたい。
④ キャリアアップに関してたくさんの方が興味関心を示し始めている。
つながり、出会い、マッチングの大切さを痛感した。
⑤ 役目、役職等につき実践につながるような場面を多くしていくことが大切である。
⑥ 実践することでその立場になってみて自分がどうできるか考えるよいきっっかけ作りになる。
⑦ 自分を変える人に出会う。
⑧ 総合的な学習の時間でいろいろな体験ができるようにしたい。
⑨ 教える立場の人も学ぶことが大切である。
⑩ 学んでほしい事と学びたい事の差を減らすようにしたい。

参加者より	・やはりマンパワーだと思いました。すてきな人のところにすてきなことがおきる。(必然ですが) そんなマンパワーのある人になれればと思いますし、育てたいと思います。 ・成果を残す、実績を求めるという点がとても特徴的で他とちがうインターンシップだと感じました。学生にとってのみでなく、地域にとってもプラスになる素敵な取り組みだと思います。ありがとうございました。 ・とてもさわやかでわかりやすい発表でした。ステキな活動で、宮原さんの得意な部分が生かされていると思います。誰もがそんな活動に出会えるといいと思います。 ・伊那谷のＪＲの駅で最も利用する生徒の多い伊那北駅前に生徒と信大生の集まる場を作り、活動の拠点ができるといいなと思います。生徒が主体となりながら行政や企業とも連携しながらうまくファシリテートできないと思いました。 ・ありがとうございました。元気のない若者の支援をしてるので、温度差を感じました。 ・日頃の活動実践に感銘を受けました。地域とつながる取り組みの益々の発展に期待します。 ・定型的でない取り組みだと感じました。 ・地域企業の“熱”を感じることができました。どうしても学校と企業はなかなかつなげないのでがんばっていきたいです。 ・熱い想いをいただきました。実践をしているのがすばらしいです。 ・学びを実践にというより実践から学ぶという視点の方が強かったなと気づきました。ありがとうございました。 ・お疲れ様でした。フレッシュな力を感じることができて勉強になりました。

分科会

8

地域・保護者と共に家庭学習の充実を目指す学校の取組に対するPTAの関わり

発表者：辰野中学校PTA　H27年度PTA副会長　垣内　由佳
司会・運営：宮田村教育委員会　伊那食品工業株式会社

●　発 表 内 容

辰野中学校はH25年に「家庭学習創出事業」のモデル校に指定された。「家庭学習が本当に生徒の力になっているだろうか？」「応援されることで学習意欲を高めよう」という先生方の熱意に保護者が動かされ、家庭学習をサポートして孤立感のない環境の中で学力向上に意欲的に取り組む生徒を増やそうと、辰野中学習プログラム「貫練」がスタートした。

「貫練」のシステムは、数学の宿題を先生が採点し、戻されたプリントを子どもがやり直し、昼休みに貫練室に持ってきたものを地域ボランティア、保護者、先生が採点する。

「貫練」の目的は自主学習を大切にすること。子どもたちの達成感や自ら追及する力をつけること、先生は子供にやる気を持たせ宿題提出率評価から脱却すること、保護者は点数より頑張りをほめ、家庭でも子供に声をかけることを大切にした。また、計算問題等の質問は保護者、専門的な質問は先生にと分け、しっかり教えてもらえるシステムを作った。生徒同士で教え合う姿も見られるようになり、結果、全国学力調査で数学は平均を上回り、他の教科も上昇した。

その様子を見たPTAでもお手伝いをしようと活動を始め、会員に採点ボランティアの参加を呼びかけた。保護者の採点で個人情報が漏れないように、解答用紙に氏名ではなく番号を記入するように工夫した。

今後の課題は、保護者への周知、ボランティアの維持、活動の継続があげられる。特に、中学生の保護者は仕事を持つ方が多いのでボランティアが固定化してしまい、先生と保護者は変わってしまう。変わらない地域がサポートし、先生と保護者が一緒になって継続していきたい。

● 話し合い後の発表

- 教員の熱意で保護者も動くことに感動した。職員が子どもたちのために一生懸命やりたいという姿を見せることで保護者の協力が得られる。続けることの難しさを感じた。
- ボランティアの確保が大変。ありがたさを実感。
- 個人情報の管理は先生とボランティアの信頼関係で徹底できた。他校で実施するのは難しいと思うが、工夫してやれるのではないか。
- この活動はボランティアでいいのか。ヨーロッパではボランティアにもお金がでる。給与が出るシステムにすればもっと発展していく。例えば塾の先生は日中時間がある。これまでタブーだったが、塾と学校で仲良くしていいのではないか。先生の負担を軽減でき、産が公に入ってくれば、産学官がこうして交流している意味が出てくる。武雄市で民間学習塾と連携し官民一体教育をしている例もあり、そんな展開も面白いと思う。
- 先生の熱意に動かされた PTA もすごい。先生や PTA が変われば思いが変わるのは当たり前。先生が昼休みに指導するのは完全にボランティアで、先生の負担が大きすぎる。地域に力と時間のある人はたくさんいる。ボランティアの善意に甘えすぎている気がする。少しでも時給を出して継続すれば先生の負担軽減になり、子どもの力をつけることもできる。また、顔を知ることで子供は挨拶し、地域の人とつながる事にもなる。
- 採点する保護者には回答に解説を付けてもらって保護者の不安も取れ良かったという話があった。子どもたちの達成感と保護者がほめることのよさを感じる取り組みが有効だと思う。
- 教育とは本来人間を豊かにするもの。教科以外で、地域が持っている美術館・博物館など、学校・家庭・地域・町が活用しないと教育の幅が広がらない。親も地域のよさを感じることが大事。算数国語は何も地域性がなく、豊かな子供は育たない。我々が子供だった頃と比べると、価値観が多様化し教育そのものが変わりつつある。
- 企業に求められるのは学力向上と人間関係。数学と国語が大事で、学校や家庭の教育で作っていかなければいけない。PTA・地域の人との関わりで、人間関係の形成能力が高まるのではないか。

参加者 より	・辰野中の組織、システム、素晴らしいですね。校長や数学科職員の熱意に PTA が動いたという話、考えさせられました。いろいろ難しい面もあるようですが、せっかく作られたこの学習プログラムが続いていくと良いですね。 ・確かな実践、手応えのある実践を伝えていただきありがとうございます。“目からウロコ”の内容ばかりでした。親へのアプローチ、丁寧に考えていかなければと思います。時代の流れの中で今、転換期かも・・・ですよ。 ・学校をサポートする役割としての PTA は大変良いことだと思いました。次は家庭学習の元にあるものを探すことだと思います。これからもご活躍を期待します。

昨年度
講師より

フィードバックインタビュー

2016 年事例発表
「親子で学ぼう会から
見えたてきたこと」

富県小学校 PTA
小牧　学　（右）
竹松　政志（左）

＜小牧　学＞

一昨年、親の姿を子どもたちに見せる、ということで小学校でショー形式でおこないました。それが今年、文部科学大臣賞をいただくことができました。私たちも自信が持てた反面、つい最近、ひとりのある保護者の方からこんなことを言われました。「小牧さんたちはそういうふうにやったけど、みんなが小牧さんたちのような保護者じゃない。みんな同じようにできるわけじゃない」と。その方は、これから PTA を担っていく立場の方で、同じようにできないよなぁ、でもやってかなきゃいけないかなぁ、という複雑な思いがあったんだと思います。そのとき私はこう言いました。「同じようにやらなくてもいい。その時できる人が一生懸命やれば。自信を持って子どもたちに姿を見せようよ。そのために、私たちも一生懸命手伝っていくよ」と。そうやって、大人の自己肯定感ではありませんが、いろいろみんなで支えあって盛り上げていくことがこれから大事なんじゃないかな、ということを感じて、その方と語り合う機会を持てました。

＜竹松　政志＞

PTA 会長として前年から引き継いだ昨年、はじめは、何をしようか、という気持ちでした。ただ、賞を取るのが目的じゃなかったんだと思っています。長く続けること、伝えたいことをどう伝えることができるかということをものすごく悩みました。たとえ１０分でも５分でもいい、私たちが伝える場を設けようと学校とかけあい、４５分、ひとつの授業の中で２人の親に限定して、仕事についてじゃなくても、語りたいこと、生き様を話してもらう時間を設けさせていただきました。その中で、キャリア教育って何するの、仕事のことでしょ、という意見が多くありました。それに対して、「違うんです。僕たちの生き様を伝えるんです」ということでその日を迎えました。強く感じたのは、私たち保護者、親もキャリア教育ってどういうことか、学ばなきゃいけないということでした。これから長く続けていく中で、まず子どもたちに伝える、そして保護者の皆さんにも伝えていく、そうした活動を長く続けていきたいと思っています。

2016 年事例発表
「帰ってこられる場所、その地で起業する意義 ～地元と共に生きるということ」

ファストレーンプロダクション
城倉　賢一

昨年、地元で起業した経緯などお話させていただきました。その後、赤穂中学校、南箕輪中学校に呼んでいただいて、お話をさせていただきました。赤穂中学校では、どうして地元で起業したのか、地元への愛着、についてお話しました。南箕輪中学校では、職業のこと、こういう大人が地域にいる、ということを伝える役目をいただいて、お話をしました。映像で発信するという武器を持っていますので、この地域をより知り、発信して、子どもたちにこの地域を好きになってもらえるような仕事を続けていきたいと思っています。

自分にも子どもが産まれたこともあって、今の僕らの世代ががんばって、この地域をより面白くしていく必要があると、強く感じています。

挨拶

エンディングインタビュー

信州大学
高等教育研究センター
教授

加藤　鉱三

私の宣言に「まず自分がエンジョイ」と書きました。どうしてキャリア教育が必要かというと、家庭と社会の教育機能がなくなったから学校に丸投げしている、というのが実態だと思います。とすると、投げられた学校はとてもかわいそうですので、キャリア教育やっていただく、こういう会も非常に有効だと思いますが、まず社会と親が面倒をみようという発想が重要なのかなと思っています。

今日、とてもいい光景を見させていただきました。まずひとつは、こちらに入ってきた時に、おそらくスタッフの方だと思いますが、女性の方々が満面の笑みでひとりひとりにお辞儀していらっしゃいました。これだよなと思いました。今日の会を絶対成功させるんだという気迫に満ちていました。自分もすごくわくわくしていらっしゃる。自分もすごく楽しみたいと思っていらっしゃるということだと思います。

また、赤穂高校の小林先生にお話をうかがうことができました。就職を担当しているそうで、地元の会社の中には、人間を成長させようとすごくがんばっていらっしゃるところがあり、表情を見ればわかる、とおっしゃっていました。どうして表情を見ればわかるかというと、やはりエンジョイしていらっしゃるからだろうと思います。

私自身教育に関係する仕事をしていますが、まず自分がエンジョイすることが、教育機能をあげることなのだろうと思っています。

信州大学
学長

濱田　州博

八十二銀行が若手の経営者向けにおこなっている研修を、今年から信州大学経営法学部が請負い、プログラムを作っておこなっています。その最後の懇親会と修了証を渡す会に私も出席させていただきました。

とてもいいなと思ったことは、当然のことながらプログラムを学ぶことに意味はありますが、一泊二日の研修を四回実施する中で、肉屋さんや製造業の方などいろんな方と交流することができるということです。この会も、普段お話できない人と交流できる機会として、非常にいいと思っています。このかいもふだんお話できない人とお話できる機会として非常にいいなと思っています。

最後に、私がふるさとについて最近感じたことをお話します。私は神戸出身ですが、通っていた幼稚園も中学校も統廃合されて今は残っていません。しかし、高校は残っていまして、最近、四十年ぶりぐらいに母校に行き、講演をする機会がありました。正門の位置も変わり、校舎も新しくなっていましたが、一番懐かしかったのは、講演が終わった後に一人の先生が近づいてきて、話していると、ひとつ上のクラブの先輩だったこと。卒業以来の再会でしたが、話し方で覚えていました。あの頃一緒に学んだ人は、どこかで覚えているんですよね。なんでもないことを話した仲間ということで、安心感も感じました。その時、「ああ、ふるさとに帰って働くのも一つの選択肢としてあったかもしれないな」と思いました。

大学を卒業してすぐの頃にはそんなことは思わないかもしれません。今になってよく考えてみると、ふるさとはいいな、と感じます。この会は、そういう気持ちを思い起こさせる会でもあると思いますので、今後も長く続いてほしいと思います。

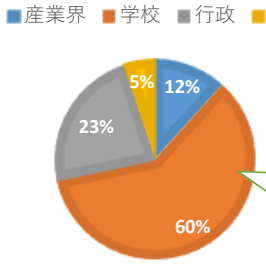
表情

1 講師の事例発表はひと
2 あなた自身の事例を
3 自分ゴトとしてど
200円

声　交流会アンケート

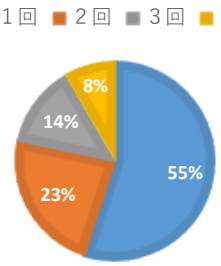
〇参加者アンケートより〇

アンケート回収（60枚）内訳



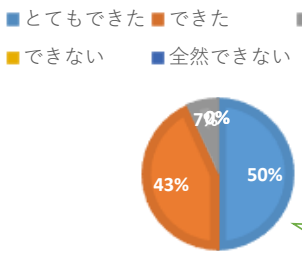
学校関係者（60%）の提出が多い

交流会は何回目の参加ですか？



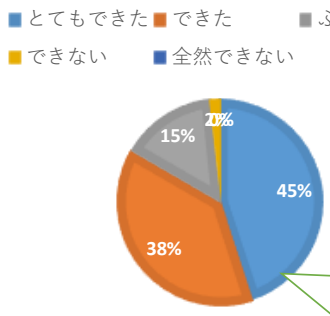
初参加（55%）
複数回参加（45%）

キャリア教育や人材育成について考えを深められましたか



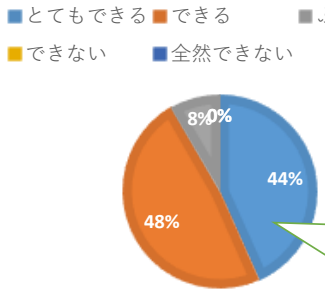
とてもできた＋できた＝93%

産学官の方と交流することはできましたか



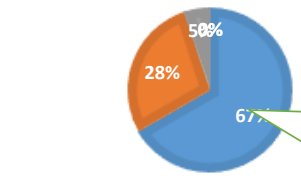
とてもできた＋できた＝８３％

今後の行動につなげることができそうですか



とてもできる＋できる＝９２％

今後もこのような会は必要と思いますか



とても思う＋思う＝**９５％**

・「産学官で交流することを通して、今後の行動に学びや気づきをつなげること」を目的にして実施したが、アンケート結果で一定の成果を検証することができた。
・今後もこのような会は必要と考える参加者が多く、継続していく必要性ある。
・記述項目で、過去の交流会参加者に「交流会参加後、具体的にどのような実践（変化）をしたか」聞いたところ、**９２，５％**の方がそれぞれの取組の返答があり。実施・継続の意義を感じる。

基調講演の感想（一部紹介）

・「ふるさとを知っているか」というひとことから始まった講演で見せていただいたスライドの中には地元のものでありながら知らないものもたくさんあり、まだまだ勉強すること、知るべきことがたくさんあると感じさせられました。次世代、子どもたちにつなげていくためにまずは自分たちが行動すること、みんなでやっていくことの必要性を実感しました。熱い講演ありがとうございました。

・技術の伝承の大切さを感じました。製造業に携わるものとしても、この上伊那から世界へものづくりを発信していきたいと思いました。また、事業運営にあたっては美しい景観を損ねないよう厳格に環境管理を行いたいと強く感じました。

・岐阜市から来ました。岐阜の人も地元愛に乏しい人が多いと感じます。先生の熱意を少しでも地元に持ち帰りたいと思います。ありがとうございました。

・あつき思いが伝わりました。自ら行動すること。実践します。ありがとうございました。

・とても貴重な講演をありがとうございました。上伊那のこんなにすてきなところがあるとは知りませんでした。これから自分も自分の足で訪れてみて伝えていきたいと思います。

・先生、是非「上伊那学」のテキストを作ってください。お願いします。ご講義大変参考になりました。

・自分が歴史を作るなど考えてもいませんでしたが、やはりその自覚をもって生徒を育て、地域を作っていかなければならないと強く感じました。
日々の見ていた文化財でしたが、先生にあそこまで「すばらしい」と教えていただき、そのよさを再認識できました。文化財について、さらに知りたいと感じました。ありがとうございました。

・自分の生まれ育った故郷を愛し、やがては故郷にもどり、故郷のために何かしたい…そんな思いをもって生きていけるようなそんな子どもを育てていきたいと思います。

・先生の講演は今日で 2 回目。今日も身体の内から何ともいえない熱いものが沸き上がってくるものがありました。郷土をもっともっと学んでいき、私の孫にもしっかり伝えていきたい。小さい頃から生活していても知らない所が随分あるなぁと実感しました。

・本日はありがとうございました。昨日、本校では「ふるさと学習」と称した地域を題材とした学習がスタートしました。子どもたちは大人が思う以上にふるさとに誇りを持ちたがっていると感じます。今日の先生のようにふるさとの良さを語り、生徒と共にそのよさを楽しむことのできる人間にならねば…と感じました。心に灯をともしていただきました。ありがとうございました。

・上伊那教育会、郷土研究部、歴史研修会等、教師として参加してくださる方が本当に少なくなっています。先生の本日の講演を起爆剤として、「上伊那再発見」郷土研究を広く呼びかけていこうと考えました。ありがとうございました。

・地元の良さを子ども達に伝える、学ばせる以前に自分が足元のことを何も知らないということを痛感させられました。未来のための先人の作ってきた歴史や、ふるさとについて知ることが大事であることを念頭においてキャリア教育を進めたいと思います。

・明日辰野東小で「朝日会学校美術館」の初回理事会が開かれます。朝日会は有賀喜左衛門さんの作った会でした。中川紀元、瀬戸團治の作品をはじめ多くの作品があります。朝日会が残した作品群を朝日会が残した風土、そこに育つ子ど子たちが織り成す学校の空間を常時公開する美術館となります。先生のお話に心が震え勇気がわきました。先が明るく見えました。ありがとうございました。

・「今残っている素晴らしい場所は誰かが守って来た所」心に残りました。多くの人に伝えていきたいです。

・他県（岐阜）からの参加で、場所は知らない所が多くありましたが、とにかく郷土を愛する熱い心に感動しました！

交流会全体を通して感想

・産学官それぞれの立場で事例発表があり、色々なお話を聞き、考えさせられることがありました。地域とつながる、子どもを育てるための大きなヒントをいただきました。この出会いに感謝です。（学）

・たくさんの方と出会い、お話を聞かせていただき、ありがたかったです。分科会のお話をもう少しじっくり聞きたかったです。中学で何をすべきか、明確な答えはまだ出ませんが、もっと生徒たちに本物（企業の方々や仕事）に触れる機会をつくりたいと思いました。（学）

・はじめてお会いさせていただいた方と色々お話しをさせていただき刺激になりました。（地域）

・辰野町のキャリア教育の現状が知り得たと思います。産業界と学校側の考え方にギャップがあるように感じます。お互い人手と時間が足りないことから子どもたちへうまく伝えられないジレンマがあることを認識いたしました。分科会は少人数制なのでやりやすいが、時間が限られており、意見交換は一人がしゃべり過ぎると難しいグループがありました。（産）

・小さいエリアでなく、上伊那という比較的大きなエリアに生きる人々が連携し、生きていく心を参加のたびに感じている。小中の学びをどう高校につなげていくか、そして高校の実践を楽しみにしていきたい。（学）

・笹本先生の講演が非常に印象的でした。「志」の高さに感銘を受けました。我々青年会議所としても地域の誇れる歴史を知り発信していくことをやっていかなければと思います。、また新たな出会いの場に参加させていただき感謝いたします。（産）

・地域のこと、学校との企業のつながり関わりについて考えました。学校と地域のつながり教育現場においてとても大事だと思います。職場体験、文化祭等を通して交流を深めていきたいと思います。（学）

・御柱を通して地域文化や人々のつながりの大切さを感じました。若い人が減る中、昔ながらの共同体が機能不全を起こそうとしています。共同体再生のためには、細やかな違いにとらわれずおおらかに楽しんでいける活動（祭）が大切だと思います。（学）

・講演会、分科会共にとても良いお話を聞くことができ、とても勉強になりました。キャリア教育を通し、子どもたちに大切なことを伝えていけれたらと思いました。そじて、自分自身ももっと上伊那のことを知り、伝えていけれたらと思いました。（学）

・司会の方たちが、リラックスしたムードを作り出していて、参加しやすさが生まれました。こうした会の中で参加する側が気持ちよくいられる内容だったと思います。必ず関わる場面を用意してくださり、地下ない方と知り合えてよかったです。（学）

・ＰＴＡ、地域との関わりについて、学校として具体的に思い（ビジョン）をもってあたることが大切であることを改めて確認させていただきました。（学）

・これまでもいろいろな企業の方、学校等のお話を聞く機会がありましたが、分科会の形はよかったです。箕輪進修高校の実践発表を聞き、高校との情報交換（キャリア教育の縦の連携）の機会がほしいなと思いました。ドリームペーパーコミュニケーションさんのお話しは、アクティブラーニングについて、またそれがキャリア教育とどう結びついているかがわかりやすく話していただき、大変参考になりました。（学）

・上伊那で行われている多くの取組を知り、新たなプラン作りへつなげられそう。（学）

・子どもたちにいろんな大人に会わせたい。子どもたちの知っている世界（私も含めて）狭いので、たくさんの大人に出会うことで視野も広がると思います。

・実践の発表が地に足のついたものがより多くなってきていると感じた。この交流会が一助になっていると感じて感謝している。

・分科会の時間を 1，5 倍に伸ばしていただきたい。もう少しあると議論が深まると思われます。異業種の方々と交流化できて、貴重な場となりました。ありがとうございました。来年は多くの先生方に参加してもらえたらと思います。

・自分と異なる分野の方とお話しでき、自分のできることを考えるのにとても参考になりました。企業における教育を学校職員の教育に置き換えて考えたとき、参考になるものが多くありました。
・授業の中に「教えない！子どもを信じて待つ時間」をつくっていくこと。成功体験とともに失敗体験も大切にする。その際、「成功させるためにはどうすればよかったか」を振り返る。そして、フォローの声かけをする「失敗は必ず生きる！」、チームで働く力をつけさせたい。仲間と協働して成果をつくる力。について学ばせていただいた（学）
・教育関係の方々と知り合いになれてよかったです。産学官の交流が大切だとおもいました。学びのまちプロジェクトの活動にも関心をもっていただけた。（産）
・自分たちの郷土の良さを知り、郷土を愛し、やがては自分の生まれ育った地に戻り、生活したいと子どもたちに思ってもらえるよう働きかけていきたいと思いました（産）
・地域に対しての歴史の中で初めて知ることも多くありました。自分がこの地域に誇りをもつことで子どもたちにも伝えられることを改めて感じました。またＰＴＡの取組をお聞きして、地元のところで取り組むにはどんな課題があるかを考えて、取り入れられるところから始めてみたいと感じました。
・分科会の進行担当だったの、他のところはよくわかりませんが、分科会に分かれたことで話をする側も聞く側もプラスだったと思います。（官）
・分科会 2 回はせわしなく感じたが、思いのほかワークが盛り上がって楽しかった。（進行役の方は大変だったと思う）話す方としては、盛り上がってよかったと感じた。
・企業が独自でキャリア教育を支援することは大変だと思うので商工会のような組織とうまく連携して共催という形であれば企業の負担も少なく、キャリア教育を行うことが出来るのではないかと思った。
・今年でこの交流会は 4 回目の参加になります。毎回ワクワクしながら参加させていただいております。今年は先生の参加率が高く教師の研修会のような雰囲気もありました。学校という枠の中で人生の多くの時間を過ごしてきた教師と、実生活で生きる産業界では文化や常識や価値観に違いがあるように思います。今後も回を重ねるごとに産学官のギャップは徐々に埋まっていくとよいと思います。きっと「私たちが必死に教えていることは実生活でどれだけ役にたつのだろうか」という迷いもあると思います。教師が実生活に触れる貴重な機会かと思いました。産学官で生きる場所や立場は違えど「伊那谷の子どもたちを立派に育て、この伊那谷の未来を支えてほしい」という思いで手を取り合ってつながって行けれると思います。まずは教師のためのキャリア教育が必要かもしれません。すぐに目に見える成果は出なくともこの取り組みは伊那谷の未来のためにも、さらに伊那谷に続くであろう他の地域のためにも絶対に必要なものです。この取り組みをなくしたら将来の伊那谷は若者いないさみしい地域になります。将来の伊那谷が地域全体での高い教育力、高い民度、自然との調和、幸福度の高さで世界に誇る地域、世界が注目し地域釈迦の見本となるなるためにも、この産学官交流会の末永い継続を強く支持します。
・郡内各市町村で持ち回り開催することにより、キャリア教育がふるさとのよさを学び感じ取ることとつながっている思いを強くしています。今後も未開催の町村での開催をさぐるとよいと思います。（学）
・各校のコミュニティースクール関係者にも周知し、参加を呼び掛けてみると、さらに交流の輪が広がるように思います。（学）
・大変有意義な会でした。特に他業種の方のお話をお聞きできたことがよかったですが、学校関係者の参加数が多く、グループ作りには苦労しました。もっと「産」「官」の方の参加が多いといいなあと思いますので、来年度に向けてＰＲをお願いします。昨年度、キャリア教育担当だったからと参加しましたが、来年度も参加したいと思います。（学）
・大変すばらしい会に参加できましたこと、心より厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。キャリア教育は一生涯続く！会場で出会った教職員の方々の退職後の人生設計ができていないことが問題。『人生１００年時代』に『一人多役』の働き方・生き方の中で『セカンドステージ』ではなく、『マルチ

ステー　　ジ』という活躍が求められる。正確のない時代だからこそ、こどもだけに限らず、業種や世代を超えた学び合い（アクティブラーニング）の必要性を強く感じた。（官）
・企業の教育やビジネスの世界にいる方が考えたアクティブラーニングなど、とても参考になりました。今後、生徒がキャリア教育を一層自分のこととして、積極的に取り組めるような学びを考えていきたいと思います。
・各講演・分科会でそれぞれ今後の自分に活かしていけるようなお話を聞けて大変ためになりました。自分の中ではもちろん、職場の仲間と共有し、上伊那地域をより魅力のあるものにしたいと感じました。（官）
・ありがとうございました。パワーをもらいました。（地）
・年々実践的になっていると感じます。一番ついていけていないのは校長たちだと思います。それだけに楽しみがあります。ほんとは、純真で教育をどのようにでも変えられる立場と力のある人たちですから。この会は、学校のがんじがらめの現状に涼しい風を吹かせてくれる彼らのための研修会です。若い人、女性の参加を多くしたい。（学）
・市町村単位では官がコーディネーター役になって、キャリア教育が円滑に進められているように感じました。高校を卒業して、進学しても、上伊那に戻ってくるために、本校でも高校の時の企業研究など理解を勧めたいと思います。（学）
・3 年間通した宮田中のキャリア教育の実践に大きな示唆をいただいた。（学）
・未来セッションはとてもいい企画だと思います。（学）
・地域の中でそれぞれが大事にしていることを工夫していることを学び合える機会として貴重な場だと思います。（学）
・中学生の職場体験は、働くことについて、学ぶ貴重な機会です。同時に小中の教職員も夏休みあたりに２～３日職場研修できる機会があってもいいなと感じました。（学）
・学校関係が多く、ややバランスが悪い気がしました。企業の方に来てほしい。（学）
・いろいろなお立場の方と上伊那のこと、子どものこと、社会や教育のことなどお話ができ、視野を広げることができました。先生方や子どもたちに何かの形で働きかけたいと思います。（学）
・キャリア教育として、企業ができること、中学職場体験、インターンシップ、企業側はある程度、ボランティア活動と割り切って取り組めるようにしたい。社内外の調整は必要だが、夏休み期間の公開インターンシップ企画など、できることはあると思う。将来に向け、長期のゴールに向けて産学が目的を同じにしないとだめだと思います。（産）
・地域の仕事について、産の方のご意見を伺いたかった。（官）
・地域の人口減など問題が多い。子どもの数の減。（産）
・インターンシップはとても良い取り組み。（官）
・若者の都市部流れ、企業と学生がつながっていない。（官）
・大変勉強・刺激になりました。分科会もう少し時間があると良かったです。（学）
・上伊那のすばらしさを再認識できた。分科会では、キャリア教育につながる話を聞くことができました。辰野町のＰＴＡの学校への係わりは素晴らしい話で感動いたしました。（官）
・大変良い機会でした。惜しいには時間がもう少しあったら掘り下げて話を伺ったり、意見交換ができたかと思います。（地）
・分科会がとても参考になりました。様々な土地場の方とお話ができてよかったと思います。また最初の講演会では、自分がもっと地元について知らなければいけないと思いました。（学）
・官、特に産の方々の考え方を感じる貴重な機会です。ここに参加されている方は、地域のことを熱く思い、実践に移そうとしている人ばかり。まったく三者が同じ土俵で、めいめいの子どもたちのために力を合わせていきたいと思いました。（学）

・様々な視点での意見や感想を聞くことができ、大変参考になりました。実体験、疑似体験を通じて、子どもにどのようなことができるか考えさせられました。（産）
・両分科会で、産・学・官そして地域がそれぞれの思い、願いを伝え合う仕組みが、できることが大切だと思いました。互いに思いはあっても、それを共有する機会がなかなかないという自治体が多いのではないかと思います。（学）
・とても有意義な時間を過ごさせていただき、ありがとうございました。様々な立場の人々が、交流を深め、地域を盛り立て、子どもたちを成長させるには、きわめて重要な取り組みであると思います。今後もこのような取り組みがありましたら、ぜひ参観させていただきます。（学）
・大変印象に残る研修会でした。ありがとうございました。いろいろな職種と交流できよかったです。（学）
・キャリア教育を総合的な学習の時間に据えて、村当局の協力を得ながら、郷土への思いを深めている様子がよくわかりました。転職して、これから働く人の話を聞き、若い人のやる気とパワーを感じることができました。（官）
・これだけ多様な立場の方が、これだけ集まれることが、上伊那の力だと実感しました。ＪＲ飯田線で最も生活の利用の多い伊那北駅周辺の高校生や大学生が集える場をつくり、活動拠点にすることができないだろうか・・。信大農学部の学生さんや南信工科短大の学生さんに、どの運営スタッフにかかわってもらえるといいんだけどなあ・・。（学）
・ちょっとめんどうだなと思うこともありますが、とても刺激になるので楽しみに参加しています。なるほどなとおもうことが多くあります。（官）
・内容が充実している素晴らしい交流会だったと思いますが、学校関係者が多く、もう少し異業種の方と話せればと思いました。また分科会の時間がもう少しあると議論、交流を深めることができたのではないかと思います。（学）
・もっと産の方が多くなると、普段接する機会が多くなるのでありがたいです。管理職よりも３０代・４０代の教職員が参加できるとよいと思います。話し合い交流を始めたところで、次の活動やグループ替えを迫られ、もう少し落ち着いて交流ができるとよかったです。長すぎることもよくないと思います。（学）
・大変刺激を受けたプログラムでした。講演会はふるさとのよさに目を向けることの価値を再認識できました。分科会では、２つとも、「協調性」「チームワーク」がキーワードとして、挙げられる内容で、改めて学校教育で育てるべき力を考えることになりました。ここで学んだこと、感じたことを明日からの実践に生かしたいと思います（学）。
・今回の事例に学ぶ発表と交流は、初めて分科会方式で行われ、45 分 2 回転で実施されました。教委の係長がファシリテーターを務め、私はタイムキーパーをさせていただきました。第 1 回めは、3 人 1 組で、第 2 回めは相手を変えて実施しました。45 分の中にきっちり収めることに気を使いましたが、講師を交えてチームワークよく運営できたように自負しています。全体的に時間運営の厳しいところはありますが、会場の特性も考え、共有セッションなどを工夫し、少しでもゆとりある時間設定を考える必要があるかと思います。今回の取り組みは、今後の開催に大いに参考になると思います。より動きやすい方向で考えていきましょう。（官）
・講演では講師の先生が大変熱く、感情の熱がワアー！と燃えるような感覚になりました。“まずは自分が学び”“それを伝える”ということは、何に対しても大切だと思いました。“村の人に伝える使命”を果たそうと思いました。オープニングの司会に声をかけていただき、ありがとうございました。辰野出身だからこと、辰野への思いをもって、やることができまそた。あの場に立たせていただけて、たくさんの出会いがありました。（官）
・分科会方式はすごかったと思います。参加者の当事者意識が高まっていました。担当でしたので、他会場の発表内容も気になりました。（官）

過去交流会に参加し具体的にどんな変化・実践をしましたか

（過去交流会参加者の方への問いかけ）

・産・官の方に積極的にお願いしていいんだという安心感と、地域の子どもたちをみんなで育てるという共通の意識をもってキャリア教育に携わることができはじめたと思います。回を重ねるごとに知らないこと「これはいいな！」思えることを知れてびっくりです。（学）
・中学校、高校のキャリア教育授業に講師として参加した（産）
・学校のキャリア教育の授業に交流会で出会った産業界の方を講師としてお願いした（学）
・物事楽しく考えるようになった。（学）
・交流会のやり方やアイディアを学校の授業に導入した。（学）
・交流会で出会った方との縁で色々な教育事業につながった（官）
・キャリアフェスにブースを出すことにつながった（地域）
・地域の文化や歴史についてささやかに研究し子どもたちと勉強しています。（学）
・来年度成人式を迎える皆さんが、実行委員会を結成し、小学生と「ふるさといいじま」のよさを学ぶ学習会を 9 月に行いたいと申し出てくれました。あと 3 か月ですが、具体化を検討しています。
・昨年の出会いから傳田さんにコーディネートしていただいた夢大学。今日は新人 2 人を連れてきました。まず上伊那をしってもらおうと思いましたので。（学）
・地域の産の方々とのつながりが深くなったように思う。
・主に、信州野球界の再編のために活かしています。上伊那バースボールサミット、長野県ベースボールサミットをやりました。「上伊那から甲子園の会」をさらに発展させます。
・コミュニティースクールの一環として、地域の方々にできるだけ、学校にかかわってもらおうと地域の表示に中学生が貢献することを考えるようになりました。今は、地域のアマチュアカメラマンの撮影した写真を２０枚ほどお借りして、フォトギャラリーを作ってみました。いろいろな大人の方と交流できる学校でありたいと思います。
・地域（自分の住んでいる）に対して、よりかかわっていこうという思いを強くした。子どもたちが戻ってくる町へ。
・地域の将来について、危機感を強く思い、必要な事業が展開できるよう働きかけた。（官）
・官として、学の考え要望を大切に考え、産とのつなげられる方向を考えられればと思いますが、実際に取り組めることは、なかなか難しいことが多くあると思います。常に意識していくことを大切にしていきたいと思います。
・地域のことをもっと知ろうと思うようになりました。新聞やニュースをよくみるようになったと思います。（官）
・地域の皆さんと積極的に関わるようになりました。（学）
・よりネットワークを広げることに自信がもて、生徒の研究活動に多くの輪を広げることが出来た。昨年度の研究から本年度の全国総文祭の県代表として発表することとなった。
・「郷土愛」という言葉にしびれました！！！ふるさとに誇りを持ってほしいという思いが強まり、学校で地域の方のお話を聞く機会をもちました。子どもたちのふるさと再発見になったと思います。（学）
・職場体験学習受入れやキャリア教育の考え方が大きく変わった。（産）

メディア記事

たつの新聞
発行所
〒679-0122 辰野町平出上町236-9
たつの新聞社
編集・発行人 薩摩 建
電話 代表41・0313
FAX 41・0812
インターネットページ
www.shimin.co.jp
E-mail
tatsuno@shimin.co.jp
©たつの新聞社 2017年
定価1カ月1,580円
（1部売り60円 （税込み）
本紙をお届けする販売店
共和堂新聞店 ☎41・0065
伊藤新聞店 ☎46・2007
コンビニもご利用ください

ふるさと舞台に次世代育成

キャリア教育産学官交流会

県立歴史館 笹本館長講演も

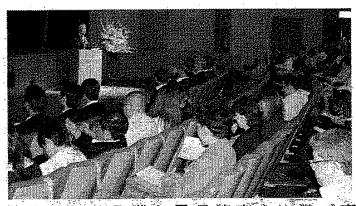
上伊那地域が一体となり、ふるさとを舞台にしたより良い次世代育成と地域づくりを推進しようと「郷土愛プロジェクト（向山孝一会長）」県教委キャリア教育産学官交流会が30日、辰野町民会館で開かれた。産業界、学校、PTA、行政の関係者ら約250人が集まり、基調講演や分科会を通して、キャリア教育や人材育成について考え合った。

主催したのは、上伊那8市町村の産学官組織が構成団体である郷土愛プロジェクト（向山孝一会長）。県教委や各市町村キャリア教育推進協議会（委員会）が共催し、毎年持ち回りで開いている。

向山会長は「大人である私たちは、ふるさとの大事な価値観である歴史や風土を勉強し、それぞれの社会的立場の中で次の世代に伝えていく役目を持っている」とあいさつ。加島範久町長、大田寛長野県副知事もキャリア教育の重要性や必要性などを強調し、参加者に推進への協力を呼び掛けた。

基調講演は、長野県立歴史館の笹本正治館長が「ふるさとに学ぶ」と題して講演。笹本館長は、「この地域が良くなるようにと活動してきた先人たちの努力や知恵を再認識しないといけない」と前置きし、先人から伝えられ、次世代につないでいくべき上伊那の史跡や文化財、祭りなどを写真で紹介した。

引き続き、八つの分科会に分かれて意見交換。分科会では川島小学校の御柱祭を通した地域との絆、辰野中学校PTAの学校との連携、町の実践型インターンシップ活動などがテーマとなった。会場では、辰野町内の小、中学校、高校、短大で実践している特徴ある教育などについてパネルで展示するコーナーも設けられた。



笹本さんの講演を聞く参加者

将来考える切っ掛け

辰野中2年生が職場体験

辰野中学校2年生は、きょう31日まで2日間にわたり職場体験学習に臨んでいる。進路学習の一環で、勤労や職業適性などへの理解を深める。生徒たちは病院や保育園、食料品店、福祉施設、精密業など町内外50ほどの事業所で、仕事を間近に見て社会人としての姿勢を学び、熱意などに触れた。

辰野製パンには、生徒3人が訪問。生地の状態から焼き上がりまでの流れや袋詰めなど

[日刊] 昭和25年1月7日第3種郵便物認可
3日 駅 エ 44

子どもの育成考える

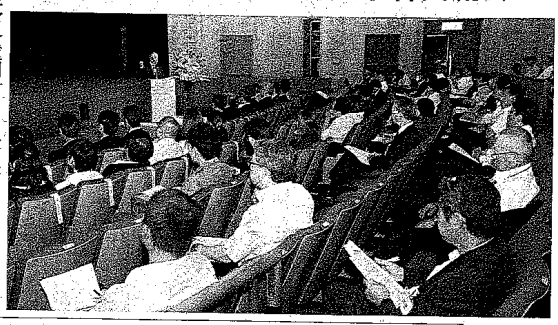
辰野でキャリア教育産学官交流会

上伊那地方の産学官各種団体でつくる「郷土愛プロジェクト」（会長・向山孝一KOA会長）は30日、第4回キャリア教育産学官交流会を辰野町民会館で開いた。地域の企業や学校、保護者、行政関係者ら約250人が参加。「ふるさとと共に」をテーマに、講演や分科会を通じて子どもの育成のあり方を考えた。

郷土愛あふれる次世代教育と地域づくりの推進を掲げ、分野を超え学び合う場として会場持ち回りで開いている。向山会長は「われわれには古里を学び伝える責任がある。子どもたちを数多くのフィールドに立たせ、経験の中から郷土愛をはぐくむ機会を提供しよう」と呼び掛けた。

続いて、県立歴史館の笹本正治館長（元信大人文学部教授）が「ふるさとに学ぶ」と題し講演。「子どもに郷土を学べという前に、大人が上伊那の素晴らしさを再認識せねば」とし、地域の歴史建造物や古典芸能、アルプスや天竜川などを列挙。「連綿と続く歴史や自然を学ぶと、地域の先人のつながりや努力が見えてくる。広域で進める人材育成のヒントになる」とした。

分科会は8会場で各分野の活動事例を紹介。辰野町の関係者は、全国で先進的に導入した町実践型インターンシップ事業、ボランティアやPTAが採点指導を行う辰野中学校の家庭学習プログラム「貫練」などについて発表した。（小林達治）



地域で取り組むキャリア教育について考えた交流会

「教えないから育つ!
アクティブラーニングで
人生力を育てる!」

一般社団法人
ドリームベーバーコミュニケーションズ
代表理事 米澤 晋也 氏

「高校における
キャリア教育について
(インターンシップの事例報告)」

筑紫進修高校
生　徒　笠原　玲 氏(左上)
毛利　綾華 氏(右上)
進路指導主事　山崎　仁 氏(下)
キャリア教育担当　原田　裕太 氏

「キャリアアップ事業
①未来の経営者育成事業
②インターンシップ推進事業
③子供ものづくり教室」

辰野町商工会
主任経営支援員 三澤 保徳 氏

「継続して繁栄していくために
必要なこと
～「企業の教育訓練」の仕組み～」

株式会社H-II回転機
総務人事部
辰野総務グループ部長 小澤 俊郎 氏

ふるさとと共に

～「地域で子どもを育てよう」
子どもは地域の宝
地域の未来～

第4回キャリア教育産学官交流会 in 辰野町

日時／2017年5月30日(火)　主催／郷土愛プロジェクト

少子高齢化や人口減少など、地域には様々な課題が山積しています。しかし、産学官立場はそれぞれでも、ふるさとを愛し、ふるさとや子どもたちの未来を思う気持ちは皆さん一緒なのではないでしょうか。

郷土愛プロジェクトでは「郷土愛」「人材育成」をキーワードに上伊那地域が一体となり次世代育成や地域づくりを推進するため、キャリア教育産学官交流会を実施しました。

どんな交流会ですか?

交流会では、基調講演として長野県立歴史館の笹本正治館長より「ふるさとに学ぶ」のテーマでお話しをいただき、その後開催地(辰野町)の産学官の事例を中心に8つの分科会で学び合いました。基調講演・分科会ともに、意見交換や交流の場面を多くもち「自分自身の取組にどういかせるか」を伝えあいました。

交流会は、毎年上伊那8市町村で会場を持ち回り開催しています。上伊那8市町村の事例から学び合うことで、より上伊那が一体となって次世代育成や地域づくりが広がっていくことを期待しています。

「故郷に学ぶキャリア教育」

宮田中学校
教　諭 土橋 浩一郎 氏

「地域・保護者と共に家庭学習
の充実を目指す学校の取組に
対するPTAの関わり」

辰野中学校PTA
H27度PTA副会長 垣内 由佳 氏

「実践型インターンシップ
活動について」

タグボート+辰野町産業振興課
代表理事 伊藤　優 氏(左)
理　事 宮原 陽子 氏(右)

「御柱で深まる地域とのきずな
～地域の一員となる子どもたち～」

川島小学校(辰野町教育委員会)
校　長 竹若 康雄 氏

このキャリア教育交流会、どんな人たちが集まったの?

上伊那全域から産業界関係者(経営者・人材育成担当など)、小中高大の学校関係者(校長、教諭など)、各市町村の教育委員会(教育長、担当など)、PTAや地域団体等、普段はあまり直接顔を合わすことがない幅広いジャンルの250名が一堂に会しました。多種多様な人と話し合うことで、新しい気づきやきっかけがたくさん生まれました。

なぜ、郷土愛とキャリア教育なの?

グローバル社会、激動社会の中で本当に大切なものは何でしょう? 英語が話せること? 学力…? 色々と答えはあるかもしれません。郷土愛プロジェクトでは、グローバル社会だからこそ、子どもたちの成長のためには地域と多くの関わりを持つこと、「ふるさと」を大切にする気持ちを育むことが重要だと考えています。

木を思い浮かべてください。たくましい大樹は、必ず大地とつながり、力強い根をはっています。子どもたちが地域に触れ学ぶ活動は、子どもたちの自己肯定感や意欲も高め成長を支えることになると期待しています。

今後にむけて

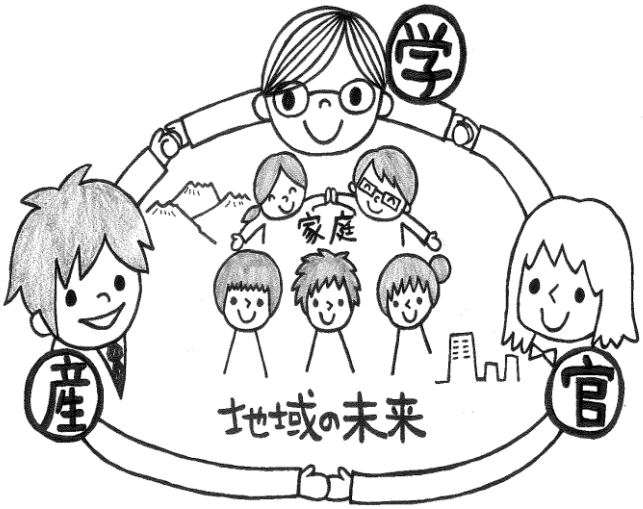
交流会の終盤には「これから自分自身がどのように取り組んでいくか」を参加者それぞれが伝え合いました。交流会をきっかけにキャリア教育・人材育成の取組みがより進んでいくことを願って終了となりました。

～参加者の感想～

大変刺激を受けたプログラムでした。講演会は、ふるさとのよさに目を向けることの価値を再認識できました。参加した二つの分科会からは、共に「協調性」「チームワーク」がキーワードとして挙げられる内容で、改めて学校教育で育てるべき力を考えることになりました。ここで学んだこと、感じたことを明日からの実践に生かしていきたいと思いました。

行政関係者として、違う立場(産・学)の考え方を感じる貴重な機会でした。交流の場面も多く、色々な立場の方と直接お話しもできました。ここに参加される方は、地域のことを思い、実践をされている方々ばかりで、郷土愛について改めて感じることもできました。産学官で同じ土俵に立ち、子どもたちのために力を合わせていきたいと強く思いました。

If you can dream, you can do it



郷土愛プロジェクト